

一仏両祖の教えを今に伝える

曹洞の禅グラフ

SŌTŌZEN GRAPHICS

2019 秋号 No.150



インタビュアー
早稲田大学名誉教授
増山均
おじいさん、
おばあさんの
世代から
吸収し、関わること
が大切です
「聞き手」藤木隆宣

こころのカギは 内側からしか開かない

変わりゆく環境の中で、育ちゆく子どもをとらえるのは難しい。

「子どもをとらえる」といつても、子どもの言動や

行為の背景にある複雑な内面の思いや願いをとらえることは容易ではない。〈子どもの心のカギは内側からしか開かない〉という指摘があるが、外側からどんなに強く、激しく他者の心をこじ開けようとしても、かえって逆効果になるだけである。子ども自身が「その気になる」「やる気になる」ことを抜きにしては、子育て・教育は達成できない。

ましま・ひとし
教育学・社会福祉学者。
1948年栃木県生まれ。日本福祉大学社会福祉学部教授、早稲田大学文学部教授を経て、早稲田大学名誉教授。『アニメシオンと日本の子育て・教育文化』子育て支援の『フィロソフィア』など多数の著書がある。

増山 均 子どもをとらえる 「三つの カガミ」

したがって私たちは、子どもの外面的な姿や言動・行為をまず「まろごと」捉え、そのうえで子どもの内面世界に近づき、子ども自身が内側から鍵を開けるのを「待つこと」が必要なのだと思う。子どもを丸ごと捉え、子どもの言動の背景を理解するためには、「家庭のカガミ」「学校のカガミ」そして「地域のカガミ」が必要であり、それら「三つのカガミ」の角度を上手に調節し合い、三面鏡のように、奥行き深く子どもの姿を映しだしていくことが求められる。

「家庭のカガミ」 「学校のカガミ」の映し合い

まず第一のカガミは「家庭のカガミ」である。家庭で親の目に映った子どもの姿である。しかし親の目というカガミは、時々曇ることがある。特に夫婦の不和や子どもの捉え方がズレている場合など子ども理解は乱れてしまう。祖父母や親族と同居している大家族の場合などは、さらに子ども理解に齟齬が生じやすい。そこで父母の役割は、子どもと一緒に生活をしている家族の思いや願いを理解し合い、我が子を映す「家庭のカガミ」を磨



挿絵 / 長谷川葉月

「子どもの仲間集団」・ 子ども社会」への注目を

「家庭のカガミ」「学校のカガミ」がどんなに上手に協力・連携しあっても、それだけでは十分といえない。子どもたちの本当の姿、子どもらしい素の姿が表現されるのは、子ども同士の関係の中だからである。親もいない、教師もいない、子どもだけの生活の中で、我が子がどういう行動をとり、どういう人間関係をつくっているのか、その姿をとらえることが特に重要な視点である。子どもは、子どもの仲間集団・子ども社会の中で、もつともそのらしい姿を示しているが、子ども社会は大人には見えにくい。学校の中にも教師には見えにくい「裏社会」として子ども社会が存在しているが、子ども社会の最もリアルで活発な姿は、放課後の地域での仲間関係の中に現れる。だから子どもの生の姿、素の姿を捉えるためには「地域のカガミ」が必要であり、そこに目を向ける必要があるのである。

かつて地域には「ガキ大将集団」という「地域のカガミ」が存在していた。自然発生的な子ども集団が、路地裏や河原や神社の境内にその領分を広げ遊びの世界を展開していた。地域の若者や大人たちの生活や生産の共同が濃密に息づいていた時代には、大人社会との緊張関係の中に子ども集団・子ども社会があり、子どもたちの姿を映す「地域のカガミ」は子育ての中に大きな位置を占めていたのである。子ども同士の「いじめ」による深刻な事件が突然発生してしまうのは、「地域のカガミ」が失われ、そこに映る子どもの姿が日常的に見え無くなっているからではないだろうか。

き合っていくことにある。

しかし、どんなにそれを素晴らしいものに磨いても「家庭のカガミ」に映る子どもの姿だけでは、子どもをまるごと捉えることはできない。一枚のカガミに映った顔は、その映っている角度しか見えないので、裏側を見るためにはもう一枚の手鏡が必要なので、子どもの姿を多面的にとらえるために、もう一枚のカガミが必要となる。

それは、保育所・幼稚園や学校の教師の目に映った子どもの姿である。「学校のカガミ」に映った子どもの顔は、多くの場合、家庭のカガミに映った子どもの顔とは違う。子どもには先生向けの顔、学校向けの顔があるからである。

ときに「学校のカガミ」も曇ることがある。教師それぞれによって子どもの見方・捉え方が違うので、担任が変わると子どもの評価が変わるように、子ども把握・子ども理解は一人の教師の捉え方では一面的になる恐れがある。「学校のカガミ」を磨き合う教師集団の努力がなされないと子どもの姿を的確に捉えられなくなる。



里山の「竹藪」が 子どもたちを育てていた

私が育ったお寺にも竹藪があつて、五月になるとたけのこ掘りをして、おいしくいただいたものです。

藤木 私は昭和十九年生れですが、七十五歳になった今でも子ども時代に想いを馳せることがよくあります。あの頃、たくさんの遊びを通じて、人間として必要なものを培い、知恵を身に付けてきたと思います。

増山 周囲に竹藪がありましたか？
藤木 あちこちにありました。

増山 子どもに限らず、日本人と自然との関係を考えるとき、竹と深いつながりがあります。今、マイクロプラスチックという小さなごみが海を汚染していて、それを魚が食べて、化学物質が魚の体内に残留したりと、そういうことが大問題になっています。石油化学製品によってもたらされた、いわゆるプラス

増山均 早稲田大学名誉教授インタビュー

おじいさん、
おばあさんの
世代から
吸収し、関わること
が大切です



早稲田大学名誉教授 教育学・社会福祉学者 増山均

チック文化の始まりは、一九六〇年代です。これは、竹が日常生活で使われなくなったこととセットなんです。日常にあった様々な竹製品が石油化学製品に取って代わられて、これが捨てられて海洋を汚染していく、そういう流れが始まったのが一九六〇年代ではないでしょうか。ですから、生活に竹を取り戻すという事は、自然との関わりを取り戻すということなのではないかなと考えて、『子育て

の知恵は竹林にあった』（柏書房刊、二〇〇三年）という本も書きました。この本のテーマは、百年単位ぐらいで考えています。これまで私が書いた本の中で一冊どれかと言われたら、私はこの本を推奨したいと思っていますのです。

今、里山ということがよく言われます。里山というと、田んぼがあつて、川があつて、家があつて、それから山があつて、雑木林があるという、



そういう風景が里山として認識されていますが、私はちよつと抜けているものがあると思うんですね。それが竹藪です。

藤木 それは何故でしょうか。

増山 竹を使わなければ生活ができなかったか

増山 子どもの遊び道具も竹ですし、それから食事。「箸」がそうでしょう。これもたけかんわりです。

藤木 そうですね。器にもなりました。

増山 そうです。二カ所切ればお椀ですから、



どろんこ遊びに夢中(福井県越前町 たいら保育園)

らです。竹は生活に密着していました。日常生活を表す漢字はたけかんむりの字が多いですね。籠かごでも笊ざるでも笠かさでも。

藤木 全て竹ですね。

こんなに便利なものはありません。材木では、お椀にするためにどれだけのエネルギーが要りますか。

ですから必要なときに、身近なところで大小

さまざまな用途に応じた竹がないと、困ったわけです。だから、すぐ手の届くところに植えていたわけですね。孟宗竹の太いものから、矢竹の細いものまで。必ず里山の風景には、家の周りや、山の麓のところに竹があるのです。それから、子どもの学習にも竹は必要でした。さんすうの計算、そして問いへの答。いずれもたけかんむりです。筆箱の筆も箱もたけかんむりです。定規なんかも昔は竹製でしたね。

藤木 伺っていますと、まさに竹で成り立っているわけですね。

増山 歴史をうんと遡りますと、古代の縄文の遺跡の中から竹細工がいっぱい出ています。籠の関する技術は、縄文時代に既にピークですよ。今以上に素晴らしいものができていますから。その文化がずっと続いてきて、田舎には必ず竹細工の上手な人がいて、子どもたちは見よう見まねでナイフを使って、竹を使って遊びに活かしました。

藤木 そうですね。鳥籠を作ったりとかね。

増山 それがずっと一九六〇年代、昭和三〇年代の中頃まで続いてきて、まさにプラスチック製品が出てきてから、それが途絶え始めた。そこが大きな分かれ道だと私は思うのです。

藤木 そうしますと、竹の文化で育った子どもたちとプラスチックで育った子どもたちという

のは、かなり違ってくるんですね。

増山 大きな違いがあります。プラスチックはあらゆる形に加工できますし、用途に合わせて出来上がっています。竹製品は、小さきまな竹を全部見分けて、取り出す場所を考えて、切り方、割り方、曲げ方、あらゆることを考えて作ります。

例えば「竹馬」が良い例です。今はそれこそ、プラスチックとかアルミのボールですから、とても便利で安全だとは思いますが、昔は子どもたちが自分で竹馬を作ったわけですね。私などは子どものころ、学校に行くまでの間に竹藪を通るでしょう。そうすると、あの竹藪のあの竹が竹馬にちょうどいいかなということを見繕みつくろいながら行くわけです。学校に行く間、ただ歩いていられるだけじゃなくて、あれがいいなと。そして時機が来たらさっさと行って切り出すわけです。太さ、節、丈を観ながら。ですからそういう地域の観察から始まっている。そもそも材料の竹の選定から始まるのですから、完成までのプロセスは長いですよ。その間にいろいろな知恵が付いたり、技術が身に付いたりしたのです。そのプロセスがすっかりなくなってしまうのですから、これは子どもの育ちにとって大きいと思います。

子どもが「失業」して しまった現代社会

増山 一九七三（昭和四八）年に「子どもの遊びと手の労働研究会」という会ができました。これは学校の先生とか保育園、幼稚園の先生たちが、どうも今子どもたちが手をうまく使えていないと。ある人は、子どもの手がむし歯になっているというような象徴的な言い方をされました。手がむし歯でうまく使えない、失われた手の労働というものを取り戻す必要があるのではないか、というわけです。

藤木 手先の器用さが退化することの対策といったものはあるのでしょうか。

増山 やはり子どものうちから手を使った遊びをする、食べるものを自分たちで育てて調理して食べるといった、生活に一番必要な、生きることに必要なところの手作業なり労働、仕事というものをきちんと位置付けることが必要だと思います。私も家ではいろいろ考えました。ただ、現実には難しさもあります。生活の中がまあ便利になっていて、子どもがやると、逆に大人のわれわれがやるのがなくなってしまうのです。

お風呂ひとつとっても、今はスイッチひとつ

でポン、と。待っていれば向こうが知らせてくれますから。「あと五分で入れます」。(笑)

ですから、させたくても仕事がなくなってしまう。ある人に言わせると、子どもは失業してしまっただと。

藤木 担える仕事がないということでしょうか。昔は家の仕事がいっぱいあって、これをやらないと風呂に入れないとか、いっぱいありましたね。

増山 そうでしょう。家の中で労働を担っていたわけですから、失業などしようがない。むしろ児童労働が過酷だったくらいです。今は反対に、子どもが家の中の仕事・職を失っている。この言葉は的確だと思います。

子どもを監視するのではなく、 関心を持ちましょう

藤木 子どもたちのいまある状況は、つまりは大人も変わってきたということになるのではないのでしょうか。

増山 そうですね。昔と比べると、明らかに子どもを大切にしようになったと思います。しかし、「過保護」という言葉もあるように、子どもたちを保護しすぎていることも背中合わせです。時代の変化の中で子どもたちをどうと



裸足は気持ちいいね(福井県越前町 たいら保育園)

らえるかというのは親たちがまだきちんとつかめない時代だと考えています。

藤木 これは大きな問題ですね。子どもとの間の距離感やバランスをどう取っていくかということは、子育てに欠かせないテーマだと思います。

増山 実は子ども以上に、私は親の問題だと思っています。子育てをどうしていけばいいのか、なかなか方向が見えないというのが現状ではないでしょうか。

昔は親がそういうことを考える必要がなかったですし、考える余裕もありませんでした。今までやってきたようにやればよかった。それしかできなかったのです。むしろそれが良かったのかもしれない。現代の親は考えなければいけないから、悩んで迷ってしまう。難しいところ

です。

今子育て世代の親御さんと話しますと、一番気になるキーワードは安全と健全です。今は保育園でも散歩コースの点検等がすごくあります。

安全が守られているのか、このキーワードは絶大です。ところが小学校の中学年から高学年、更に大きくなると、冒険とか挑戦といったように、大人がつくった安全地帯から飛び出していくというところが、子どもの育ち

にはあるわけです。安全地帯がどんどんつくられて制限されてしまうと、逆に冒険や挑戦がしにくくなってしまふ、これが現代社会の一つの大きなポイントです。

もう一つの健全という言葉は、不健全と背中合わせになります。「これは健全でない」ということになると、まさに指導や管理の対象にな

るわけです。

私は、ちょっととした
いたずらなんかはむし
ろ当たり前で、多少の
不健全な部分も、子ど
もが健康に育つ上で、
時には必要なことだと
考えています。ところが
が、やんちゃなことを
しながら育つことが自
然にあった世代は、今
ではどんどん高齢化し
て少数になってきてい
ます。その後に安全と
健全で育った世代が親
になってきているわけ
ですから、もう一回問
い直しをしなければい
けないと思います。

藤木 『曹洞禅グラフ』
の147号では、「日
本は子どもの天国だっ
た」というようなこと
にも触れておられます。

増山 歴史を振り返る
と、日本語として教育



お孫さんと一緒に読経(東京都世田谷区 永正寺)

という言葉がこれだけ使
われるようになったのは
明治以後のことです。こ
百五十年ぐらいです。そ
れ以前は教育よりも子育
てということごとと
らえていた時代のほうが
長いわけです。

その時代は子どもの育
ちに関わるような専門職
はいません。せいぜい寺
子屋のお師匠さんで、あ
とは周囲の大人が目を見
らせていました。「こう
いうことはしてはいけな
いよ」という幾つか基本
原則はありました。しか
しそれ以外は見て見ぬふ
りじゃないですけど、適
度に距離を置いて、子ど
もの育ちに任せていまし
た。でも、一方ではしつ
かり目を光らせている。
それは直接子どもと関わ
って、こう育てようとい
う「教育」とは違います。

象徴的なのは、駄菓子屋のおばちゃんの方
な方です。あのおばちゃんは教育者ではありま
せん。でも、地域の子どもたちに一定の目を光
らせているわけです。悪さをするとちゃんとし
つけてくれる、でも大目に見るところは大目に
見てくれる、いわば素人のまなざしのようなも
のがいっぱいあったと思います。そういう方々
のあたたかいまなざしのほうが子どもにとつて
は大切な気がしますね。

藤木 そういう方は昨今はめっきり少なくなっ
たように感じます。ぜひまた多くなってほしい
ですね。

増山 増えたほうがいいと思います。どうして
も健全を保つために、監視カメラも含めて、「監
視のまなざし」が溢れています。私は監視のま
なざしよりも、「関心のまなざし」にしたほう
がいいと言っています。それは決して子どもを
見ていないわけではなくて、見て見ぬふりをす
るところもありながら、遠くからしっかりと見守
っているということです。子どもに関心を持つ、
そういうまなざしを持つ大人が地域に増えてほ
しいものです。

おじいさん、おばあさんの 「孫育て」がもつ大きな意味

増山 昔は地域共同体で、おじいさん、おばあ
さんが子どもたちの周りにも家庭の中にもいた
わけです。

子育てが一回りした後のほうが、距離感の取
り方が上手になります。これは不思議なもので
すね。親はわが子というところ、こうなつてほしい
という気持ちが先に立ちます。子どもそれぞれ
のあるがママを認めてあげようと言うのですが、
なかなか親はあるがママを認められないのです。
おのれの理想の方が先に立ってしまった。それ
に対して、お年寄りも孫たちに願いはあるけれ
ど、親よりはストレートじゃなくて、ちょっと
距離を置けるじゃないですか。

藤木 そうなんです。一呼吸置けるんですよ。
増山 このちょっと距離を置けることがとても
大切だと思います。子育て世代の周りに、孫育
てができるくらいの年配の方がいるという関係
はもつと大事にしてほしいです。

藤木 そうですね。おじいちゃん、おばあちゃ
んの役割は大切なのです。

増山 ある人類学者に言わせると、子どもの次
の世代を育てる、つまり孫育てをする動物とい
うのはほとんどいないそうです。大概の動物は
子どもを育てたら終わりです。ですから一世代
越えて次を見守る、孫育てをするということは、
人間の大きな特徴なんですね。

他時後日 到育王山 一番商量 文字道理

毎日書道

高橋秀榮

作品集

ご家族のみなさまの応募をお待ちしております

お手本を参考にして、作品を半紙(横向、お名前は左側)に書いてご応募ください。(無料)
ご応募の中から優秀な作品を選び、年に1度誌上で発表し、記念品を贈呈します。
住所、氏名、電話番号を明記して作品をどしどしお寄せください。
145号~148号(前号)の応募作品の審査発表は、151号(2020年冬・新年号)にて、
149号~152号の応募作品の審査発表は、155号(2021年冬・新年号)にて行います。

送り先 〒252-0113 神奈川県相模原市緑区谷ヶ原2-9-5-5
仏教企画 電話042-703-8641

締切 令和元年11月末

他時後日
到育王山
一番商量
文字道理

今回は道元禅師の名著『典座教訓』の中から「他時後日、育王山に到れ、一番、文字の道理を商量せん(いつか育王山で文字の道理について語り合いましょ)」という名句を選び出してみました。真実の仏法を学びたいと発願し入宋された若き日の禅師が寧波の船中で出会った老僧からうけた有名な言葉です。

読者プレゼント

早稲田大学名誉教授増山均先生の著書『幸せに生きる力』を伸ばす子育て』(サイン入り)を5名の方にプレゼントいたします。仏教企画(p13の送り先)まで、お名前・ご住所・電話番号・プレゼント名を明記のうえハガキでご応募ください。
2019年11月末必着



曹洞禅グラフ148号(春号)プレゼント、島園進先生の共著『愛国と信仰の構造』は次の方々が当選されました。

青森県/濱定美様 東京都/碓井弘子様
東京都/瀧口俊子様 静岡県/玉木秀夫様
新潟県/小林美津子様

お便り募集

読者からのお便り 神奈川県 大道英隆様

まだビジネスマンで時間の自由がない私は、連休中の平成の終わりに大本山総持寺で、そして令和の始まりに大本山永平寺でそれぞれ瑞世して参りました。総持寺には父が以前おり定期的に拝顔に伺っていた関係から、落ち着いてなんとか乗り切ることができました。帰りに父の墓参りをしましたが、父の「脚下照願」の声とともに、全身に清々しい風を感じて自然と涙が溢れてきました。永平寺では「身初心なるを顧みることなかれ」の言葉を胸に厳粛な気持ちで瑞世に臨み了じることができました。永「父の恩は山よりも高し」、この恩に少しでも報い人々の幸福に貢献できる僧侶となれるよう日々精進して参りたいと存じます。合掌

藤木 次を見据えていく生き方ができるのですね。

増山 やはり高齢者の存在というのは、孫育てを通じて子どもを健康に育てていく上でも大変大きな価値なのです。ですから、高齢者との関りを大切にしなければいけません。

藤木 そうですね。大事なことです。

増山 人間は子育てを終えた後の時間が長いわけです。それはどういう意味があるのか。いわゆるおじいさん、おばあさん、とりわけ女性は、自分の子育ての経験を孫を育てるときに親たちに伝える、それによって文化を発展させてきたのです。年齢を重ねてから自分の経験を次の世代に伝えて、孫たちの育ちを応援していく、こ

れが重要なんですね。

そういうきっかけは、なかなか一軒の家単位ではできません。一緒に住んでいないご家庭が多いわけですから。そうすると保育園とか幼稚園、学校というところを拠点にして、子育て世代や子どもたちが、おじいさん、おばあさん世代からいろいろ吸収したり関わったりすることが大きな意味を持つていると思います。

藤木 おじいさん世代、おばあさん世代はまだ大切な役割を担っているということですね。今日は子育てに実際に携わっている方々だけでなく、ご高齢の世代にとっても生きる目標を与えて戴けるようなお話を伺えたと思います。ありがとうございました。

「智慧が身につく禅の作法」

1

「三慧」とは

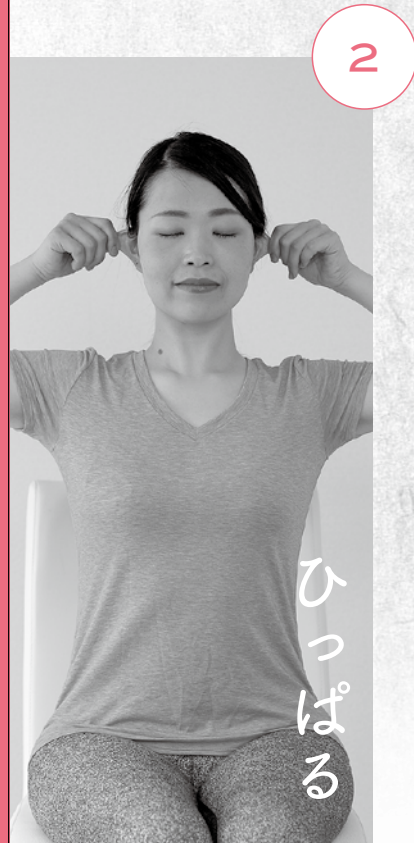
藤井隆英

ふじい りゅうえい

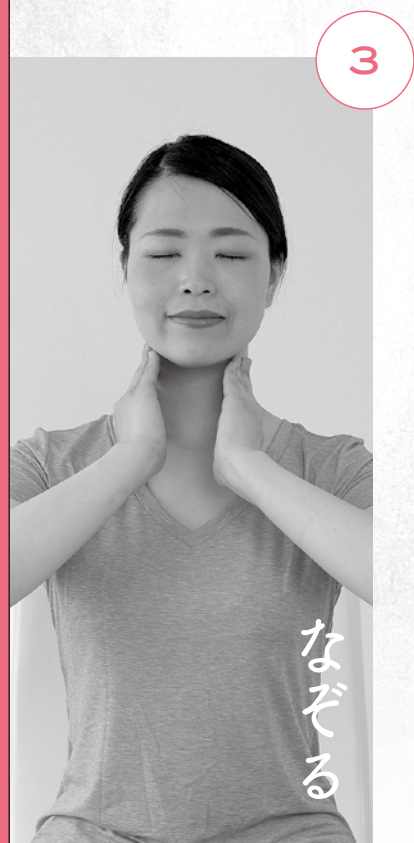
豊橋市一月院副住職。横浜市徳雄山 建功寺勤務。北海道大学水産学部卒業。同大学院中退。整体師。zafu代表。身心堂 主宰。「zafu ざふ」「安楽坐禅法」開発者。禅をベースにしたオリジナルの運動療法、動的瞑想法を伝える活動を展開。



頭部を呼吸に合わせてなでる方法です。両手の平で頭頂部を覆います。息を意識的にゆっくり吐くのと合わせ、手のひらを頭頂部から首の方に優しく下ろしていきます。ある程度吐ききったら自然に吸い、下ろしたのと逆方向に手の平を上げ頭頂部に戻します。吸いきったらまた吐きながら下ろしていきます。なでる箇所を顔・顔の横側・後頭部側と適宜変え、頭部全体をなでるようにします。



耳を呼吸に合わせてひっぱる方法です。左右耳介上部を、両手の親指人差し指中指の指先で付け根からつまみます。息をゆっくり吐くのと合わせ、つまんでいる部分を左右外側に優しくひっぱるようにずらしていきます。吐ききり指が耳からはずれそうになったら自然に吸い指位置に戻します。それを繰り返し、ひっぱる箇所をだんだん下げ、耳介全体をひっぱるようにします。



顎を呼吸に合わせてなぞる方法です。耳の下にある左右下顎骨の付け根に、両手の人差し指中指薬指の指先を裏側からそっと置きます。息をゆっくり吐くのと合わせ、両指がくっつくまで下顎骨の裏側に沿って指先を優しくなぞっていきます。吐ききりましたら自然に吸い指位置に戻します。全体を通し、触れている部分の感覚を深く感じるようにし、心地よさを重視し行って下さい。

私が担当させていただいている連載も今回で9回目です。現在までに「調身調息調心」「三毒」「貪瞋痴」という仏法の2つの教えを参究させていただきました。そして各テーマにまつわり日常にも役に立つ、禅に学んだワークをお伝えさせていただきました。

今回からは3つめのテーマ「智慧(ちえ)」を参究いたします。

「智慧」は、一般的には「知恵」と書かれる言葉です。まずこの違いを参究いたします。

▼「知恵」は、物事の道理を識別・判断し、筋道を立て適切に処理していく能力です。これは自身の価値観・住んでいる国や地域の社会規範などによって左右されるものであり、知識を高めたり社会の中で経験を積むことで身につけていくものです。

▼「智慧」は仏教語です。物事を本質からの眼で適宜に判断し、自他ともが安らかに満たされる生き方となっていく能力です。これは価値観や外的環境に左右されるものではありません。「知恵」が身につくと社会の中で生きやすくなります。「智慧」が身につくと幸せな人生になっていきます。

この「智慧」を身につける方法が「三慧(さんね)」です。三つの慧とは

▼聞慧(もんえ)・・・仏法の教えを素直に聞き受け止める方法。○思慧(しえ)・・・自ずから興る感覚や感情、想いや考えを問う方法。○修慧(しゅうえ)・・・実践を通して仏法を身心に浸透させる方法です。

今回は「智慧」を身につけるための準備として、感覚を高めながらリラクセスを促す作法をお伝えいたします。

駒澤大学名誉教授

文学博士 佐々木宏幹

弔いとは人の死を悲しみ慎むことで、葬送とか葬式と呼ばれる儀礼のことです。

弔い（葬式）の起源は大変古く、約七万年前にイラクのシャニダールの洞窟内に置かれた遺体には数種の花が供えられており、現在ではこれが最古の葬式の証拠とされています。また人類の文化の起源とも考えられています。

つまり人間は他の動物と違って、死者を大切にし、死という事実を社会的に重視し、弔いを営むことでその悲しみ、苦しみを乗り越えようとしてきました。この意味で弔い（葬式）は人間特有のもので、宗教の起源であるとも考えられます。

人間は生まれたら成長し、活動し、老化し、そして例外なく死にます。人類史上いまだかつて死ななかつた者は一人もいません。

生まれた者の結末が死です。

仏教ではこれを「生老病死」と言います。

人間は死者をととても大切にしてきました。

死者は死後には霊とか魂と呼ばれる存在となり、仏教なら仏国土、キリスト教なら天国で永く存在するものと信じられました。

毎年八月十五日の終戦記念日には、天皇皇后両陛下が日本武道館の慰霊式に臨まれ、「全国戦没者之霊」に弔意を捧げられるのは、七十年以上経つても、お国のために死した人たちの霊を尊とばれるからです。

死者を大事にし、その霊を尊崇し厚く弔うことは、次世代を担う若者たちへの重要な文化の伝達でもあるのです。

霊や魂という文字が難しいと言うなら、死者の「いのち＝人格」と言い換えることも可能でしょう。歴史を振り返ると、国や社会に大きな力を奮った人間は死後に盛大に弔われました。

エジプトのピラミッドやわが国の仁徳天皇陵などその例です。健全な国や社会を保ちゆくために、しっかりした弔い（葬儀）が欠かせないと言えましょう。

「一〇二〇年、東京オリンピックまで間もなく」となりました。日本は国際化が加速し、多くの外国人が訪れています。外国人との会話において言葉の問題もありますが、訪れる人たちの宗教や価値観、文化や習慣が異なります。今回は「食」に宗教的視点を加え、私たちが「ふつう」と思っていたことが「ふつうではない」という価値観を捉えて参ります。

読者の皆さんは、肉や魚、野菜などを万遍なく、いただくと思います。しかしその一方で、宗教や食習慣が異なり、それらが食べられないかたがいるのです。日本人が得意としている「おもてなし」の心。相手の事情を知らずに、良かれと思っただけが時として大問題になることもあるのです。

例えばイスラム教徒（＝ムスリム）が避ける食材のうち特に注意が必要なものは、「豚」「アルコール」「血液」「宗教上の適切な処理が施されていない肉」が知られています。これらの食材はコーランで食することを禁じられ、豚以外でも肉は、アツラーに祈りを捧げ、特殊な方法を行ったハラール・ミール（ハラール・ミートと

生活の中の仏教

おもてなし

久保田永俊

も）しか口にしません。特に、豚に関しては、その姿を見ることがさえも嫌悪されるため、メニュー等に豚のイラスト、またその写真掲載は避けなければなりません。肉そのものに限った問題ではないのです。ブイヨン、ゼラチン、肉エキス、ラードなど豚肉や骨、その油が使われた食材は当然食べられません。アルコールは飲用に限らず、料理酒、調味料（みりん）など料理に使われるため特に注意が必要です。さらに宗教上の教義で禁じられていないようですが、嫌悪感を示す食材もあります。うなぎ、イカ、タコ、貝類、漬け物などの発酵食品です。料理の食材として扱うことは避けたほうがよい食材でしょう。

今回は宗教的視点から食の事例を取り上げてみましたが、紙幅の都合上、一部の事例しか取り上げておりません。外国人と食事をする、あるいは私たちがおもてなすことは、宗教など、そのかたの背景まで気を遣って行なうべきなのではないでしょうか。それが国際的「おもてなし」なのだと思います。

おもてなすということは、他者のことを想って自らが心をくだき懇切丁寧に行動すること

です。このありようを曹洞宗の道元禅師は『典座教訓』の中で、食事をつくるものが忘れてはいけない三つの心で説かれていますが、このことから、おもてなすという行為にも通じているといえるでしょう。「喜心」 つくる喜び、もてなす喜び、そして仏道修行の喜びを忘れないころ

「老心」 相手の立場を想い、懇切丁寧に作る老婆心、親切のころ
「大心」 とらわれや、かたよりの心をすて、深く大きな態度



挿絵 長谷川葉月

で作るころ
食事は、欲を満たすためのものではありません。いのちをつなぐ繋がりがあリ、そこに私たちが存在しているのです。宗教や文化習慣が異なるにしても、いのちをないがしろにしない生き方、食事のとりかたなど、お互いの関係や文化に、よい影響が与えられる「おもてなし」を、日本人として行なっていきたいものですね。

くぼた・えいしゅん

1975年、東京都生まれ。駒澤大学仏教学部卒業。中瀧寺（千葉県いすみ市）住職。自死遺族に寄り添う活動に取り組んでいる。



皆さまを笑顔で お迎えします

秋田県男鹿市
海蔵山大龍寺

〒010-0511 秋田県男鹿市船川港船川字鳥屋場34
TEL 0185-24-3546
Facebook <https://www.facebook.com/dairyuji.oga/>
Email dairyuji.oga@gmail.com
拝観時間
午前8時30分より午後4時30分まで(4月から10月まで)
午前8時30分より午後4時まで(11月から3月まで)

取材=小野崎裕宣



紅葉が溢れる境内



お寺で開催されたマーケット(市場)



ライブ企画「アイヌ文化と音楽」

東北・秋田県の西部、日本海に突き出た男鹿半島を市域にもつ男鹿市は、人口約二万七千人、地元で伝わる伝統行事「なまはげ」は大変有名で、ユネスコの無形文化遺産にも登録されています。

JR男鹿駅からほど近い、港を見下ろす高台に建つ海蔵山大龍寺は、竜神信仰が盛んな地域にあって、永く農業、漁業に従事する方々からの信仰を集めてきた寺院です。

現住職の三浦賢翁師は、道元禅師の御遠忌の折、アメリカ・ロサンゼルスに駐在したご経験をお持ちの方で、「開かれたお寺」を目指して様々な試みに取り組んでこられました。また、臨床宗教師としての活動も継続されています。奥様の三浦グラッチェンさんは、アメリカ合衆国の東部、ニュージャージー州のご出身。二〇〇〇年に大龍寺に嫁がれ、ご住職とともに、郷土のお寺の魅力を発信し続けています。

海外の「開かれた」 寺院や教会に刺激を 受けました(三浦住職)

「開かれたお寺づくり」を始めたくっかけをお伺いします。

住職以前、アメリカやヨーロッパのお寺、教会等を拝見して、出入りする人々の多さ、多様なイベントでの施設の活用の仕方にとっても刺激を受けました。例えば着物姿を見る機会はアメリカの寺院のほうが、日本よりも多かったくらいです。また、和太鼓の生の演奏がお寺を使って行われていました。日本から遠いからこそ、日本の文化にもっと近づきたい

という日系人の方々が一生懸命活動をされているのです。お寺は文化を発信する拠点にもなっていました。

大龍寺にえられる皆さまのご感想はいかがですか

住職 実際にお寺にいらっしやることで、新たな発見をされる方が多いようです。お寺の雰囲気、お庭等、若い方や外国の方も楽しまれています。



左：奥様の三浦グラッチェンさん

右：三浦賢翁住職

最初は、とにかく敷居を低くして、今までお寺に足が向かなかった方たちにも、まずはお寺に来て欲しいと努めてきました。今いろいろなイベントや企画、坐禅会を開催するようになり、お寺に来るのが楽しみだというお声を戴いています。これからもさらに分かりやすい、来られる方が受け入れやすい工夫をしていきたいです。

アメリカから秋田県男鹿市 へ外国語指導助手として来 ました(グラッチェンさん)

グラッチェンさんは、生まれ育ったアメリカでの大学生時代に初めて禅と出会いました。心が落ち着く坐禅に素晴らしさを感じ、そこから毎週禅堂に通われるほど熱心に取り組まれたのだとか。アメリカではお寺に限らず禅堂がたくさんあり、いまでも新鮮な感覚で坐禅が活かされているそうです。

大龍寺との縁はアメリカで結ばれたのですか。

奥様 仏教に興味のあった私は、チベットの仏跡を巡り、その後ネパールに半年間留学しました。アメリカに一度帰って、仕事を幾つか探してい

て、ネパールでまた仕事をするか、あとはもう一つ、日本に来るかという気持ちがありました。日本で英語を教えるジェットプログラム(外国語青年招致事業)の中のALT(外国語指導助手)の仕事に申し込んだところ、そちらが先に合格が分かりまして、それでここ秋田県に来ました。そのときに住職と出会いました。

お寺の奥様としてこれからに向けてのお気持ちを聞かせください。

奥様 現在、マインドフルネスにすごく興味を持っています。仏教の考えや坐禅を日常に生かせるように伝えたいと思っています。もちろん昔からの行事はとても大事ですね。お檀家さんのおかげでお寺があるので、行事も大事にして伝統を守りながら、カフェとか坐禅会とかいろいろなことをしたいです。今よりももう少し気軽にお寺に入れるようになるといいかなと思います。

『傘松道詠』

道元禅師の和歌集。寛元三年（一二四五）初雪の歌から
禅師寂滅の建長五年（一二五三）中秋までの詠歌六十首が収められています。

草の庵いほに立ても居ても祈ること

我より先に人をわたさむ

都には紅葉しぬらんおく山はり
夕へも今朝もあられ降り

道元禅師の和歌

22

皆さまを笑顔でお迎えますー秋田県鹿市 海蔵山大龍寺

20

生活の中の仏教ーおもてなし 久保田永俊

18

秋彼岸によせてー吊いと人間 佐々木宏幹

16

感じることで調う「智慧」が身につく禅の作法① 藤井隆英

14

毎日書道 高橋秀榮

13

早稲田大学名誉教授 増山均インタビュー

4

子どもをとらえる「三つのカガミ」 増山均

2

表紙画/平川恒太

子育ての知恵は 竹林にあった

増山均著 柏書房刊



定価:本体1,700円+税
(最寄りの書店にて直接おもとめください)